

自然談話における二人称代名詞「あなた」についての一考察 — 認識的優位性 (Epistemic Primacy) を踏まえて —

下谷 麻記

要旨

二人称代名詞「あなた」は、元々空間的遠称を表わす指示詞「彼方」が文法化現象を経て、人称代名詞「貴方」へと意味的变化を遂げたとされている。そのため、先行研究では敬語との関わりが指摘され、社会文化的な観点（例えば、聞き手との社会的上下関係、親疎関係、性差等）から多くの考察が行われてきた。しかしながら、その使用背景の複雑さや日常会話における使用頻度の低さから、日本語教育の現場では、扱いの難しい言葉として知られてきた。本研究では、このような二人称代名詞「あなた」について、自然談話に現れた例を詳細に分析することでその多様性を探っていく。特に、「あなた」が聞き手を直示する場合とそうでない場合に着目し、話者間の認識における非対称性または優位性との関わりを踏まえて、「あなた」の果たす談話・語用論的機能を考察する。そして最後に、本研究の考察が日本語教育・学習の中でどのように応用され、貢献し得るかについて触れたい。

【キーワード】 二人称代名詞、あなた、認識的優位性、役割語、客観性

1. はじめに

現代日本語において、二人称代名詞の代表例と言え、ば、「あなた」が挙げられるが、その実際の使用に関しては、他の二人称を表わす接辞表現や対称詞、呼称詞（例えば、「～さん」「～君」「お前」「あんた」「きみ」等）に比べて、使用する相手との社会的上下関係、親疎関係、また性別上の制限等が複雑に絡むため、使用頻度も極端に低いことが指摘されてきた（大高 1999; 横谷・長谷川 2010 等）。日本語教育の現場においても、「あなた」は適切な使用の難しさから、単語としての導入はされるものの、二人称を表わす言葉として使うことを避けるよう指示する教師も少な

くない。しかしながら、ほとんど全ての初級日本語の教科書で、「あなた」は早い段階から二人称代名詞として紹介され、英語や中国語等の逐語訳が載せられている一方で、その具体的な使用に関しては、詳しい説明に乏しいものが多い（大浜他 2001）。そのため、学習者が母語や翻訳の影響を受けて「あなた」を無作為に使用することで、違和感のある発話や誤用を招いてしまうということがしばしば起こる。

本研究では、このような二人称代名詞「あなた」の使用にみられる様々な問題について、日常会話をはじめとする自然談話データを通して、量的かつ質的に詳しく考察していく。また、「あなた」の使用にみられる多様性にどのような要因が関わっているのか、さらに、実際の会話の中で「あなた」の使用がどのような役割を果たすのか、話者の「認識的優位性」(epistemic primacy, Stivers et. al. 2012) という概念との関わりを踏まえて、談話・語用論的観点、そして、相互行為言語学の観点から探っていく。そして最後に、これらの考察を日本語教育の現場でどのように生かされるべきかについて議論したい。

2. 先行研究

二人称代名詞「あなた」は、これまで通事的観点、また社会文化的観点などから様々な研究が行われてきた（橋口 1998; 大高 1999; 鈴木 1999; 三輪 2000, 2005; 横谷・長谷川 2010; Takahara 1992; Ishiyama 2012; Kim 2012 等）。以下では、これらの先行研究で述べられていることを整理し、問題点を指摘していく。

まず、人称代名詞の通事的研究で明らかにされてきたように、「あなた」が元々は空間的遠称を表わす指示代名詞「彼方」であったことはよく知られている（古語大辞典 1982; 広辞苑 2008 等）。その空間的遠称を示す指示詞「彼方」の照応機能は、次第に時間軸へと転用され「過去」や「未来」を表わすようになる。そして、その後、同等以上の第三者（三人称）を婉曲的に指し示す人称代名詞へと転じ、その婉曲表現が敬意を含意するものとなり、三人称代名詞「貴方」が使われるようになる。さらに、その変化は近世以降も進み、目上や同輩に対して敬意を示す二人称代名詞へと発展していったとされる（橋口 1998; 鈴木 1999; 三輪 2000; Ishiyama 2012）。

このように、「あなた」にみられる空間指示詞から人称代名詞への意味変化は、文法化 (Grammaticalization, Hopper and Traugott 2003) の過程を辿った結果であるとされ、「あなた」の使用が敬語と深く結びついていることが度々指摘されてきた（三

輪 2000, 2005; Ishiyama 2012)。また、近代以降もその意味変化は続いており、現代においては、周知の通り、「あなた」に含まれていた敬意は薄れ、同輩以下の人に対して、また親しい男女間で（特に、夫婦間で妻から夫に対して）使われるようになり、相手によって親密さや親愛を表したり、遠慮や疎隔を示したりすると言われている（大高 1999; 三輪 2000, 2005; Takahara 1992）。

この「あなた」の使用における敬意の軽薄化については、第二次世界大戦前後に出された『中等学校作法要項解説：文部省調査』（1933）や当時の社会生活における礼儀作法について書かれた『礼法要項』（1941）等に「同輩に対する対称詞として、通常「あなた」を用いるべきだ⁽¹⁾」と促す記述がみられることから、橋口（1998）は、敬称としての「あなた」の役割は、この頃に途絶えたのではないかと示唆している。

現代における「あなた」の使用に関しては、社会文化的な視点から、その他の二人称代名詞（「お前」「あんた」「きみ」等）や、親族語彙、役職名、固有名詞などを含む対称詞、呼称詞の働きと比較した研究が多く行われている。特に、話し手と聞き手の社会的上下関係、親疎関係、また公的・私的場面の違いなどによって、どの人称代名詞（対称詞、呼称詞）がどの場合に選択されるのか、またそれぞれの語彙選択にみられる話し手の聞き手に対する心的態度はどのようなものかについて、アンケート調査や作例を通して検証している（大高 1999; 三輪 2000, 2005; 横谷・長谷川 2010）。

大高（1999）によると、「あなた」は、話し手と聞き手が、私的組織内関係にある場合（例えば、夫婦間で妻が夫に対して使う場合）も、公的な組織関係にある場合（例えば、上司が部下に対して使う場合）も、互いが友好関係にあり、親愛表現としてのみ使われるとされ、話し手と聞き手が敵対関係にある場合は、他の人称代名詞（「きさま」「てめえ」「あんた」等）が選択されるとされている。この点については、横谷・長谷川（2010）の研究において類似した統計結果が示されており、家族内における呼称の選択に限られてはいるが、呼称の選択が家族関係（夫婦間、親子間）の親密さ、横柄さ、正常さにおいて一定の談話モダリティを示すと述べられている。⁽²⁾

これらの研究結果については、確かに「きさま」や「てめえ」などの二人称代名詞のほうが「あなた」よりも語気が鋭いため、親密さや敬意の程度が低いと判断されても不思議ではないだろう。それ故に、話し手と聞き手が敵対関係にある場合の

二人称代名詞としても連想されやすいのかもしれない。しかしながら、対立や衝突のある状況下で「あなた」が使用されない（言い換えると、友好関係における親愛表現以外で「あなた」は使われない）とは言い切れない。実際、以下でも取り上げるが、拮抗した関係にある二者間で「あなた」が使用されることについては、橋口（1998）、三輪（2000, 2005）、Kim（2012）らの研究でも報告されている。

また、現代では、「あなた」は社会的に下位の立場にある者から上位の立場にある者に対して使われることはない（または、望ましくない）と規範的（prescriptive）な視点から指摘されることも多いが（奥秋 1988; 三輪 2005）、実際には、社会的な地位に関係なく使われる例も見受けられる。これに関しては、上で述べた二者間の対立との関連性から考察され、「あなた」の使用が聞き手の面子を脅かす発話行為（Face-threatening act, 以下“FTA,” Brown and Levinson 1987）にあたることが指摘されている（横谷・長谷川 2010; Kim 2012; cf. Takahara 1992）。以下の例はその一つと言える。

(1) 党首討論のデータ：元自民党総裁 谷垣貞一氏による発言（2011年6月1日）

1. ⇒ え:::, (0.5) 総理, (0.3) あなたと党首討論するのは,
2. (.)これが (.) 二度目だと.sss と思いますが,
3. (0.3) 今日, 私が .hh (0.2) 総理に申し上げたいことはただ一つ,
4. (0.2) お辞めになったらいかがですかと,
5. (0.3) いうことであります.
- 6-21. (省略)
22. ⇒ nで, あなたに:, やめろと, (0.2) 申し上げるのは,
23. ⇒ .hhhh あなた四つ: (.) の方面から不信感を持たれている,
24. このことを申し上げなきゃならない.
25. nでまず第一に, (0.2) 国内から見てみますと,
26. .hhhh まあ, 菅内閣の支持率 u:: より,
27. 不支持率が倍ぐらいの傾向はずっと続いているが,
28. ⇒ 何よりも大事なことは, 菅さんあなたになられてから,
29. あ:::, 菅さんのもとで選挙は,
30. (0.2) ほとんど勝っておられませんね?
31. そして, .hh (0.2) 重要な選挙でも候補者を立てられない,
32. こういうことがありました.
33. .hhh これはやっぱり, 国民の心が,
34. ⇒ .hhh あなたから離れている,
35. 何よりの証拠だと, (0.2) 私は, 思います.

例(1)は、明らかに対立する立場にある二者間で行われた討論の一部であり、ここで

使用されている二人称代名詞「あなた」は、国政運営の立場上、下位の話し手（野党側の党首）が、上位にある聞き手（総理大臣、つまり政権与党の党首）に対して直接使用したものである。また、この討論の中の発話は、形式的には敬語が使われているが、話し手の不満や怒りといった強い心的態度も伺うことができ（cf. Kim 2012）、大高（1999）らが指摘する友好関係における親愛表現としての「あなた」とは、大きく掛け離れたものであることが分かる。このことから、「あなた」の使用は、二者間の客観的な社会的上下関係や、友好関係の有無によって、単純に決定づけられるものではないということが言える。

このような「あなた」にみられる二人称代名詞の複雑な性質について、Takahara（1992）は、何らかの距離を示す機能（*distancing function*）が、相手に敬意を払ったり、相手を遠ざけたりする過程で働いているのではないかと示唆している。このTakahara（1992）の指摘は非常に興味深いものであるが、その（心理的・社会的な）距離感を引き起こす要因については詳しい説明がない。また、その他の先行研究と同様、日常会話をはじめとする様々な発話環境において実際に使用された「あなた」の具体例についての考察がないため、不明な点も多い。自然な会話データに基づく人称代名詞の研究に関しては、談話文法（*discourse and grammar*）の観点から、一人称単数を表わす代名詞（「あたし」「わたし」「僕」「俺」等）の使用について多角的に分析した研究（Ono and Thompson 2003）があるが、二人称代名詞「あなた」に関しては、筆者の知る限り、自然談話データに基づいてその言語形式と機能における関係性を明らかにした研究は見当たらない。

英語に関しては、インタビュー会話に現れる二人称代名詞 *you* の使用について、「成員のカテゴリー化（*Membership Categorization*, Sacks 1972; Schegloff 2007）」の観点から分析した興味深い研究がある（Stirling and Manderson 2011）。Stirling and Manderson（2011）によると、人称代名詞の選択は、会話の参与者間の成員分類を示す相互行為上の道具として用いられており、とりわけ二人称代名詞 *you* の使用に関しては、話題に対する権限（*entitlement*）や認識的権威（*epistemic authority*）の存在が影響していると指摘されている。Stirling and Manderson（2011）で取り上げられている *you* の使用は、聞き手を直示するものというより、一般化された *you*（二人称複数）や、話者自身を含む *you*（つまり、一人称の *I* や *me* で置き換え得る特殊な *you* の使用³⁾）に焦点が当てられているため、日本語の二人称単数を表わす「あなた」の使用にそのまま当てはめて考えることは難しい。しかしながら、人称代名

詞の選択と話題に対する話者の知識量、認識の確かさ、権限、権威、そして認識上の優位性 (epistemic primacy, Stivers et al. 2012) などとの関連については、後に述べる日本語の実際の会話データにも少なからず共通する部分が認められ、本研究の考察対象としても注目に値する。

以上の点を踏まえ、本研究では、まず「あなた」が実際にどのような談話環境の中で、どのように使用されているのか、具体例とその使用頻度を基に考察していく。特に、先行研究で指摘されてきた「あなた」の使用にみられる多様性については、話題に対する認識的優位性がどのように作用しているのか詳しく分析し、自然談話における「あなた」の言語形式と機能における関係性、そしてその談話・語用論的な役割を明らかにする。

3. データ

本研究で扱う会話データは、談話の種類から大きく三つ(A, B, C)に分けられる。まず、一つ目のタイプ (A) は、より自然発生的な会話の流れからなるもので、インフォーマルな設定で行われた日常会話を始め、ノンフィクションのドキュメンタリー映画やテレビ番組の中で映された自然な会話のやりとり、また対談番組の中の司会者とゲストの会話やインタビューによる会話のやりとり、講演の中での体験談等がこれに入る。二つ目のタイプ (B) は、ドラマや映画 (フィクション) 中の会話や発話からなるもので、基本的に脚本に基づいたものである。そして、三つ目のタイプ (C) は、いわゆる政治談話 (political discourse) からのデータであり、2009年から2012年の間に行われた国家基本政策委員会合同審議会での党首討論(7回分)での発言のやりとりである。

タイプ (A) の会話データに比べ、タイプ (B) のデータは、脚本によって発話の設定があらかじめ決められているという点で、会話の連鎖構造 (sequential organization) や話者交替のシステム (turn-taking system) が、日常的で偶発的に起こる会話とは大きく異なる。またタイプ (C) のデータも、かなり特殊な “Institutional talk” (社会組織、機関の活動の一部として起こる会話, Heritage 1998) ⁽⁴⁾ であり、議題の内容がある程度前もって準備されているという点や、発話時間に制限があるという点などから、タイプ (B) と同様のことが言える。そのため、これらの談話の種類が言語使用に与える影響も少なからず考えられ、「あなた」の使用についても、その影響が現れることが予想される。本研究では、これらの談話の種類におけ

る違いとその影響を重視し、それらをあえて考慮に入れることで、二人称代名詞「あなた」の使用環境と使用頻度、そして、2 節で触れた認識的優位性 (epistemic primacy) との関連を検証していく。表 1 は、それぞれの会話データの録画・録音時間とその中に現れた「あなた」の使用例数をまとめたものである。

表 1

談話（会話）データの種類	録画・録音時間	「あなた」の使用例数
(A) 自然会話・対談、インタビュー、講演	約 17 時間	23 例
(B) ドラマ・映画（脚本に基づく会話、発話）	約 10 時間	109 例
(C) 国会（党首討論）	約 8.5 時間	86 例
合計	約 35.5 時間	217 例

タイプ (A) に関しては、約 17 時間分の会話データのうち、インフォーマルな会話（2~3 名による 28 セットの会話）は約 7 時間、ドキュメンタリー映画や対談番組の出演者（司会やゲスト、撮影者ら）による自然な会話のやりとりは約 9.7 時間、講演のデータは約 0.3 時間だった。⁽⁵⁾ なお、それぞれの会話データは、基本的に Jefferson (1989) による方法、規則、記号に従って、筆者が文字化した。⁽⁶⁾ 書きおこしの際に使用した記号 (Transcription symbols) については、付録を参照されたい。

では、表 1 に戻り、それぞれの談話タイプに現れる二人称代名詞「あなた」の使用頻度と「あなた」の示す対象に注目したい。まず、使用頻度については、タイプ (A) のデータ（より自然な会話や発話の流れの中）をみると、最も録画・録音時間が長いにも関わらず、23 例しか使用されていないのが分かる。一方、タイプ (B) や (C) のような特殊なタイプの発話環境の中では、それぞれ 109 例、86 例と、録画・録音時間のわりに、使用頻度が高いことが分かる。次に、「あなた」の示す対象とそれぞれの使用頻度の割合について、表 2 を参照されたい。

表 2

談話（会話）の種類	指示対象		合計
	聞き手	聞き手以外	
(A) 自然会話・対談、インタビュー、講演	10 (43.5%)	13 (56.5%)	23 (100%)
(B) ドラマ・映画（脚本に基づく会話、発話）	106 (97.2%)	3 (2.8%)	109 (100%)
(C) 国会（党首討論）	86 (100%)	0 (0%)	86 (100%)
合計	202 例	16 例	218 例

表 2 から分かるように、(B) (C) のデータでは、聞き手を直示する「あなた」の使用が圧倒的に多く、聞き手以外を示す例は非常に少ないことが分かる。一方、(A) のデータでは、聞き手以外を示す「あなた」の方が、聞き手を直示する「あなた」よりも若干多く現れており、他の二つのタイプのデータと大きく異なる結果を示した。談話の種類によって、「あなた」の使用頻度やその指示対象がこのように異なるのはなぜなのか。以下では、2 節で触れた「認識的優位性 (epistemic primacy)」の表明と人称代名詞の使用との関わり、そして、それぞれの談話の種類の特徴による影響などを踏まえて、①『聞き手を直示する「あなた」』と、②『聞き手以外を示す「あなた」』の実際の使用例について更に詳しく考察していく。

4. 考察：人称代名詞と認識的優位性 (Epistemic Primacy) との関わり

日常会話の中で、目下の話題について、「誰の視点がより認識的に権威があり、より影響力のあるものであるか」ということを把握することは、相互行為の上で非常に重要な要素である (Heritage and Raymond 2005, 15)。実際、会話の参加者は (意識的であれ無意識的であれ) その話題について互いの認識の有無、程度、優位性などに敏感に反応しつつ会話を構築していく (Scheffloff 1996; Stivers et. al. 2012)。中でも、この認識的優位性 (epistemic primacy) は、情報の伝達、提供、断定、評価などを行うための相対的な権利をはじめ、話者の知識の深さ、完全さ、特異さにおいて、話者間で「非対称性」が想定される際に話者が指向するもので、日常会話の中での言語使用に大きく作用すると指摘されている (Stivers et. al. 2012, 13-17)。人称代名詞の使用もその一つとして取りあげられてきたが (Lerner and Kitinger 2007; Stirling and Manderson 2011; cf. Kamio 1997)、以下では、日本語の二人称代名詞「あなた」の使用が、相互行為の中での認識的優位性とどのように関わっているかを踏まえて、4.1 では、聞き手を直示する「あなた」の例、4.2 では、聞き手以外を示す「あなた」に焦点を当てて検証する。そして、4.3 では、その他の人称代名詞との違いについて考察し、「あなた」の使用にみられる機能的特徴を明らかにする。

4.1 聞き手を直示する「あなた」

4.1.1 判断・評価の決定権を示唆する「あなた」

本節では、聞き手を直示する「あなた」のうち、特に、判断・評価を下す決定権のある側が、その判断・評価を受ける側に対して使用した「あなた」に着目して考

察する。まず、例(2)を参照されたい。この会話は、ドキュメンタリー映画「犬と猫と人間と」の中で、映画監督の飯田基晴氏が、神戸市動物管理センター譲渡事業支援ボランティアグループ「CC クロ」の女性スタッフ（松田さん）に、収容犬舎にいる犬の譲渡について質問している場面である。

(2) データ (A) : ドキュメンタリー映画「犬と猫と人間と」

1. 飯田監督 : この子::は::, (1.0) 譲渡の方には::.
2. 松田さん : う::ん, 多分, まわると思います.
3. 飯田監督 : °m::°
4. (1.5) ----- ((犬の鳴き声))
5. 松田さん : わりあい柴にしては大人しいから↑ね
6. 飯田監督 : °m:[:,なるほど.°
7. 松田さん : [う::ん.
8. (1.0) ----- ((犬の鳴き声))
9. 松田さん : イーって言わないでしょ?
10. (0.5)
11. 飯田監督 : [°ああそうですか.°
12. 松田さん : [イーってやらないでしょ, (.) うん.
13. (0.2) だから, わりに- あの,
14. ⇒ あなたが入ってきても攻撃的な態度とらないでしょ?
15. 飯田監督 : °う::ん.°
16. 松田さん : う:ん, .hhh だから, あの- 特に怯えて:,
ブルブル震えるとかって↑ね,
17. 飯田監督 : °う::ん.°
18. 松田さん : そういう態度もとらないから,
まあなんとか,
19. (1.4) ----- ((犬の鳴き声))
20. いけそうです.

この会話は、取材をする飯田監督の質問に対して、松田さんが答えるという形でやりとりが行われているが、1-2 行目を見てみると、飯田監督の発話（この子::は::, (1.0) 譲渡の方には::.) は、その後を松田さんの発話（う::ん, 多分, まわると思います.）に委ねることで完成されているのが分かる。このやりとりでは、情報を提供する側（= 松田さん）に、ここでの話題（犬の譲渡に関する判断）における認識的優位性があることが示されている（cf. Hayashi 2003）。実際、松田さんは、犬猫の譲渡事業の支援活動に長年携わってきた方であり、彼女自身の発話の中にも、認識的に優位な立場から相手の同意を得ようとするタイプの発話末表現「でしょ?」（9, 12, 14 行目）（McGloin 2002）や、接続表現の「～から」「だから」

(5, 13, 16, 19 行目) (Maynard 1993; Mori 1999) などの使用がみられ、情報の「与え手」と「受け手」としての互いの位置づけが見てとれる。二人称代名詞「あなた」は、14 行目の松田さんの発話に現れているが、この発話にみられるように、聞き手を直示する「あなた」は、認識的優位性を持つと位置づけられている話者から、そうでない相手に対して使われ、発話末に付加疑問文 (tag question) や断定表現などの認識標識 (epistemic marker) を伴って現れる場合が多い (Heritage and Raymond 2005; Stivers et. al. 2012)。次の例(3)と(4)も参照されたい。この二つの例は、2005 年に神奈川県川崎市の市議会議員補欠選挙に、いわゆる落下傘候補として初出馬した山内和彦氏の選挙活動の様子を追ったドキュメンタリー映画の一部である。

(3) データ (A) ドキュメンタリー映画「選挙」

この会話は、山内氏が街頭演説を始める際に、同じ選挙区の山際大志郎衆議院議員が応援のために付き添い、山内氏に助言している場面である。(山際氏は、年齢は山内氏より若い、政治家としての経験は長い。)

1. 山内氏: ああ。 --- ((マイクのチェック))
2. (4.7)
3. 山内氏: はい、先生どうぞ。 Khh. --- ((マイクを渡そうとする))
4. 山際議員: 先生どうぞって、
5. 山内氏: [°あの hh°
6. ⇒ 山際議員: [あなた]がやんなかったら意味ないじゃん。 =
7. 山内氏: =あ、そうですね。 .hh HUH
8. (4.4)
9. 山内氏: おはようございます、
10. (0.3) グリーンハイツの皆様おはようございます、 (続く)

(4) データ (A) ドキュメンタリー映画「選挙」

この会話は、駅前で街頭演説する山内氏に、市民の一人 (山内氏と同年代と見える女性) が立ち止まり、一票を求める山内氏に意見を述べる場面である。

1. 女性: 他の人はほら、みんな-
2. もう、もう一番身近な宮前区のために十分つくして、
3. 山内氏: そう
4. 女性: 尽くした上で来てるでし [よ:?
5. 山内氏: [はいはい、そうです。
6. ⇒ 女性: [あなた]のこう経歴見たらまだ全然::=
7. 山内氏: =そうです [ね、私ね::,
8. 女性: [ここには::, [尽くして°ない°
9. 山内氏: [あの全然政治の経験ないんですよ。

- ((画面切り替わり))
10. 女性： だからねえ::, もう, [ここでね,
 11. 山内氏： [そう.
 12. 女性： 普段からやってる人にね?
 13. 山内氏： そう.
 14. 女性： あじゃ, 一票入れよう[と.
 15. 山内氏： [そう.

例(3)の6行目の「あなた」は、山内氏が街頭演説のためのマイクを早々と山際氏に渡そうとしたことを受けて、山際氏が山内氏を叱責する発話の中で使われている。また、例(4)の6行目の「あなた」は、有権者の女性が、候補者としての山内氏に不足している部分を指摘する発話の中で使われている。これらの「あなた」の使用に関して共通していることは、山内氏が、対話の相手によって、何らかの判断・評価をされる側にあるという点である。言い換えると、例(3)については、山内氏の街頭演説での振る舞いについてその善し悪しを判断できるのは先輩議員の山際氏であり、例(4)については、選挙での一票を決めるのは有権者である。このように、それぞれの会話の内容やその場のやりとりの中で、判断・評価を下せる立場にあるという認識的態度 (epistemic stance) を相手に明示する場合、二人称代名詞「あなた」は言語的資源として効果的に使用され、互いの立場の違いを前景化する役割を果たしていると言える。特に、自然会話が中心のデータ (A) では、相手の発話 (言動) の直後のターンで、すぐにその判断・評価を示す際に「あなた」が使用されており (cf. First Position Assessment, Heritage and Raymond 2005)、その会話におけるターンの構造、そして「あなた」の使用される位置も、話者の優位的な立場、権威の示唆に繋がると考えられる。

ドラマや映画など脚本を基にしたデータ (B) の中でも、このような例は多くみられたが、特に、冤罪をテーマにしたフィクション映画「それでもボクはやってない」の法廷のシーンで最も多く使用されていた。以下の例がそれにあたる。

(5) データ (B) 映画「それでもボクはやってない」(被告人質問のシーンより)

1. ⇒ 室山裁判官： (調書を見ながら) あなたは::, 途中下車した武蔵台駅で,
 2. 何をしていたのですか?
 3. (5.6)
 4. 徹平： 履歴書を持ってきたかどうか確かめようとして:,
 5. (1.0) リュックの中を探して, (.) だけどなくて:,
 6. (1.2) 取りに戻れば, 遅刻するのであきらめました.

7. (1.4)
8. ⇒ 室山裁判官： あなたが：, 再び電車に乗る時ですけど、
9. (0.7) そのドアから乗った理由は：ありますか?
10. (4.4)
11. 徹平： 一番近いというか、(2.0) とにかく目に入ったドアに：,
12. 飛び込みました。
13. (1.6)
14. ⇒ 室山裁判官： あなたがドアに駆け込んだ時、
15. (2.0) その：, 乗ろうとしている乗客の最後尾に=
16. =誰がいたかはっきり分かりましたか?
17. (1.0)
18. 徹平： 分かりませんでした。
- 19-35. ... (省略) ...
36. ⇒ 室山裁判官： .sshhh あなたは：, 警察での取り調べで：,
37. .hhhh 「私は、発車寸前の急行電車に乗ろうとしている=
38. =女子中学生の後ろから、駅員に背中を押され、
39. 女子中学生の背中に密接して電車に乗り込みました」 =
40. =と答えてはいませんか?
41. (0.8)
42. 徹平： 乗り込む時には：,
43. 前に誰がいたか分からなかったと答えました。
44. (1.0)
45. 室山裁判官： そうですか。
46. (1.3)
47. 室山裁判官： でも、そう書かれた調書に：,
48. ⇒ あなたの署名があるんですけどね：.

法廷でのやりとりは、基本的に、裁判官、検察官、弁護士らによる尋問（質問）の内容について証人や被告人が答えるという形で成り立っている。このやりとりを詳しく観察すると、例(5)が示すように、質問する側（＝法律の専門家）が質問される側（＝大抵の場合、法律の素人）に対して「あなた」を使用するのが頻繁にみられる。これは、法廷場面でのやりとりについては、当然、法律の専門家である裁判官や検察官、弁護士の方が認識的に優位であることが影響していると考えられ（cf. Atkinson and Drew 1979; Drew and Heritage 1992）、その立場的位置づけが二人称代名詞「あなた」の頻繁な使用にも現れていると言える。実際、例(5)の室山裁判官の質問発話を見てみると、「あなた」以外にも、裁判官という立場的権威、そして認識的優位性を示唆する言語形式が選択されていることが分かる。例えば、2行目では「何をしていましたか」という純粋な疑問ではなく「何をしていたのですか?」と問いかけ、非難を示唆する「～のですか」が含まれている（McGloin 1981, 1989）。また、9行目の「そのドアから乗った理由はは:ありますか?」、40行目「～と答えて

「はいませんか?」の質問では、後に 48 行目で指摘する調書の内容との矛盾点を強調、示唆すべく、取り立て助詞「は」が使用されている (Hinds 1987; McGloin 1987)。これらの表現形式は、裁判官の発話が、単なる質問や情報の確認というより、事実認定を行う権威ある立場から、何らかの判断・推測を持ってなされた発話であることを示唆していると言え、共起する二人称代名詞「あなた」の使用も、「判決を下す側」としての権威的発言の示唆に貢献していると言えるだろう。

ちなみに、法廷のシーンでは、質問される側 (=証人、被告人) から質問する側 (=法律の専門家) に対して「あなた」が使われた例が一例もなく、やはり「法廷」という特殊な場面設定と、それに関わる認識的優位性、そして立場的な権威、権限の影響が言語の選択に如実に現れているのではないかと思われる。⁽⁷⁾ ただし、この映画の中では、唯一、被告人が裁判官に対して「あなた」を使った例があった。しかし、これは、法廷で裁判官に対して直接面と向かって使われたものではなく、無実を訴える主人公に有罪判決が下った後の主人公の心の声として現れたものであった。例(6)を参照されたい。

(6) データ (B) 映画「それでもボクはやってない」(徹平の心の声)

1. 徹平: 僕は、心のどこかで、裁判官なら分かってくれと信じていた。
2. どれだけ裁判が厳しいものだと自分に言い聞かせても、
3. 本当にやっていないのだから、有罪になるはずがない。
4. そう思っていた。
5. 「真実は神のみぞ知る」と言った裁判官がいるそうだが、
6. それは違う。
7. 少なくとも僕は、自分が犯人ではないという真実を知っている。
8. ならば、この裁判で、本当に裁くことができる人間は、
9. 僕しかいない。
10. 少なくとも僕は、裁判官を裁くことができる。
11. ⇒ あなたは間違いを犯した。
12. 僕は絶対に無実なのだから。

11 行目の「あなた」は、対話によるものではないものの、主人公が自分自身の事実認識に基づいて、心の中で裁判官を判断し、評価し、裁くという、この映画の中でも特に重要なポイントで使用されたものである。ここで、裁判官を指す言葉に「彼は…」や「裁判官は…」ではなく、二人称代名詞「あなたは…」が使われているのは、主人公の心の中では“事実を本当に正しく判断、評価できるのは「裁判官のあ

なた」ではなく、「自分自身」なのだ” という話者の認識的優位性が存在するためであろう。

このように、二人称代名詞「あなた」は、話者の認識的優位性を示唆する道具として使われるが、これに関わる「認識」「知識」「経験」といったものは、実際、年齢や経験の長さ、社会的地位・立場といった表面的に分かる事柄にも大きく影響される。そのため、これまでもこうした社会文化的側面からの研究が盛んに行われてきたが、相手との表面的な社会的関係性ではなく、話者自身の内面的な認識、知識、考え、思いなどに基づいて判断された内容を、相手に対して直接「あなた」を使ってぶつける場合は、相手の面子を脅かす発話行為（FTA, Brown and Levinson 1987）となり、話者の強い感情表出として捉えられるものになることが分かる。2節の例(1)ではじめに示した党首討論のデータは、その点を最も良く表した例と言えるだろう。ここでもう一度、その例を参照されたい。

(7) データ (C) 党首討論のデータ (=例(1)と同例)

1. ⇒ え:::, (0.5) 総理, (0.3) あなたと党首討論するのは,
2. (.)これが (.)二度目だと.sss と思いますが,
3. (0.3) 今日, 私が .hh (0.2) 総理に申し上げたいことはただ一つ,
4. (0.2) お辞めになったらいかがですかと,
5. (0.3) いうことであります.
- 6-21. ... (省略) ...
22. ⇒ nで, あなたに:, やめろと, (0.2) 申し上げるのは,
23. ⇒ .hhhh あなた四つ: (.)の方面から不信感を持たれている,
24. このことを申し上げなきゃならない.
25. nでまず第一に, (0.2) 国内から見えますと,
26. .hhhh まあ, 菅内閣の支持率 u:: より,
27. 不支持率が倍ぐらいの傾向はずっと続いているが,
28. ⇒ 何よりも大事なことは, 菅さんあなたになられてから,
29. あ:::, 菅さんのもとの選挙は,
30. (0.2) ほとんど勝っておられませんね?
31. そして, .hh (0.2) 重要な選挙でも候補者を立てられない,
32. こういうことがありました.
33. .hhh これはやっぱり, 国民の心が,
34. ⇒ .hhh あなたから離れている,
35. 何よりの証拠だと, (0.2) 私は, 思います.

例(1)でも示したように、これは、元自民党総裁の谷垣貞一氏による発言（2011年6月1日）の一部で、民主党政権に対する厳しい批判として、当時大きな話題になっ

た場面でもある。この谷垣氏の発話は、彼の（または野党側の）批判的意見を強く表しているが、ここでの二人称代名詞「あなた」の頻繁な使用は、その攻撃的な非難の態度が、当時の菅総理大臣に直接向けられていることを示している。

面白いことに、データ（C）の党首討論（7回分）でのやりとりを詳しく観察すると、政党や個々の政治家に関わらず、二人称代名詞「あなた」は、野党側の議員の発話にしかみられず、国会での総理大臣の発話には、相手を「あなた」で指す発話が、どのデータにもみられなかった。このことは、国会の党首討論の場面では、「あなた」の使用が、話者間の地位的上下関係よりも、話者が国政運営に対して批判的視点、批判的評価を下せる立場にあるかどうかという点に左右されることを示していると言える。そして、実際、話者が国政運営に対して、より強く批判し、自身の判断・評価の優位性を明示しようとするほど、「あなた」の使用も頻度を増しているのが分かる。

以上のように、相手を直示する「あなた」は目下の話題（問題）に対する話者の認識的優位性の表明に結びついた表現であると言える。特に、「あなた」は、ある話題（問題）に対して、何らかの判断、評価、決定のできる側が、その判断、評価、決定を下される側に対して使用する表現であるため、多くの場合、話者同士の年齢や社会的地位、上下関係などが絡んでくる。しかし、「あなた」の使用・不使用は、このような社会文化的要因のみによって単純に決定づけられているものではないということが上の例から分かるだろう。また、「あなた」の使用による話者の認識的優位性の表明は、結果として、相手への批判、非難といった感情的な態度を示すことにつながると言える。

4.1.2 “距離感”を表面化する「役割語」としての「あなた」

前節では、話者の認識的優位性が、二人称代名詞「あなた」の使用に作用し、互いの認識的立場の違いを前景化していることを述べた。このような「あなた」の使用は、話者同士の関係性において、「親密さ」より「疎遠さ」、または相手に対する「距離感」を強調するケースが目立つ（cf. Takahara 1992）。これは、話者同士が恋人や友人関係といった親密な関係や近い間柄にある場合、特に際立って現れる。本節では、このような親密または近い人間関係にある二者間でのやりとりに現れた「あなた」の使用に着目し、そこで示唆される心理的な距離感が話者の認識的優位性とどのように関わっているかを考察していく。まず、以下の例(8)を参照されたい。

(8) データ (B) ドラマ「ビューティフルライフ」

1. 杏子： あたし、しがない図書館司書だし。
2. (3.5)
3. 柗二： そんなこと全然思っていないでしょ？
4. (3.4)
5. 柗二： 図書館司書ってさ、案外難しいんでしょ？
6. (0.9)
7. ⇒ 柗二： あなたと付き合いだしてから結構周りに聞いたんだけどさ。
8. (3.9)
9. 柗二： ていうか、案外プライドもってやってるんじゃないの？
10. (3.8)
11. 柗二： ていうかさ hh, 逆にさ、
12. 美容師とかのほうが- バカにしてんじゃないの? =
13. 杏子： =なんでよ、そんなわけないでしょ？
14. (0.8)
15. 柗二： じゃなかったら、あんな- (0.3) 小難しい映画選ばないでしょ。
16. 杏子： 小難しくないよ、良い映画じゃない。
17. (1.0)
18. ⇒ 杏子： もっともあなた寝てたけど。
19. 柗二： 単館ロードショー系って眠くなるじゃんよお。
20. 杏子： だって、だってマトリックスは二人とも見ちゃってたでしょ？
21. 柗二： もういいよ、分かったよ。

この例は、恋人同士の柗二と杏子が口論をする場面での会話であるが、二人称代名詞「あなた」は、互いの発話の中で使われている（7行目、18行目）。これらの発話に示されているように、「あなた」を含む発話には、聞いた情報（柗二の発話「あなたと付き合いだしてから結構周りに聞いたんだけどさ。」（7行目））や、直接見た情報（杏子の発話「もっともあなた寝てたけど。」（18行目））などを伴うものが多く、話者が証拠性（evidentiality）や客観性（objectivity）に志向して発話しているのが分かる。証拠性や客観性に基づく発話は、話者の認識における確かさ、信頼性、妥当性を表すため（Chafe 1986）、話者の認識的に優位な立場、態度の主張にもつながる。このような証拠性、客観性に志向した「あなた」の使用、そしてそれに伴う話者の認識的優位性の示唆は、元々近い関係にある相手との会話の中では特に、話者の相手に対する心理的な距離を露骨に表し、相手を突き放すような効果を発揮すると考えられる。

面白いことに、このような「あなた」の例は、実生活で恋人同士、友人同士といった近い関係にある話者同士の会話（データ(A)に含まれる会話）の中には一例も

見られず、データ (B) のドラマや映画など脚本に基づく会話の中でのみ特徴的に現れ、登場人物の間の微妙な距離感が演出されている。例(9)と(10)を参照されたい。
(9) データ (B) 映画「下妻物語」

1. イチコ： 行こうぜパチンコ，行くっきゃねえよ。
2. 桃子： なんてあたしが行くの？
3. イチコ： ダチだろうがよ。
4. (1.0)
5. 桃子： はあ。
6. --- ((桃子：近くの移動式の八百屋に向かう))
7. 桃子： これください！
8. 八百屋： あ，ええな.，ひらひらのお嬢ちゃん！
9. キャベツ一個お会計？ ありがとう。
10. --- ((桃子：イチコのいる場所に戻る))
11. ⇒ 桃子： 今日からこれがあなた¹のダチです。
12. (桃子：イチコにキャベツを渡す)
13. ⇒ 桃子： あなた²のダチはこの人です。(1.0) じゃ！
14. --- ((桃子：走って逃げる))
15. 桃子： さようなら，イチコ。さようなら，伝説バカ。

例(9)は、映画「下妻物語」の主人公桃子と、ひょんなことから出会った同い年のイチコ(いわゆるヤンキーの少女)との会話である。イチコは桃子に対して「ダチ」として積極的に接しているが、桃子はイチコとの距離を縮めることを拒もうとしているのが分かる。最終的に二人は友情で結ばれるが、ここで桃子がイチコに対して使用した「あなた」(11, 13行目)は、桃子の拒否の態度の示唆につながっていると言えるだろう。

(10) データ (B) 映画「下妻物語」

1. 子供の桃子： 人間は，幸せを前にすると，急に臆病になる。
2. (0.8) 幸せを勝ち取ることは，不幸に耐えることより，
3. 勇気がいるの。
4. ⇒ 子供の桃子： あなた¹，いくつ？
5. (1.0)
6. 桃子： 17歳。
7. 子供の桃子： 最悪。

例(10)は、仕事と友情の狭間で悩む桃子に対して、子供時代の自分自身が声をかけるという象徴的な場面でのやりとりである。この映画の中で、桃子は「人はみな一人で生きていくものであり友達など必要ない」という孤高の女子高生というキャラ

クター設定がなされている。そのため、子供時代の桃子の発話にも、世の中や人生、社会といったものを客観視するセリフがあえて取り入れられているが、二人称代名詞「あなた」も、そういった発話の中で用いられ（4行目）、悩みに暮れる高校生の桃子の感情と、奇妙なほど冷静な子供時代の桃子の心理状態の対比が、巧みに描かれていると言える。

例(9)と(10)の二つの例から分かるように、他人（または自分自身の）言動や物事に対して、常に客観的な目で判断し評価する桃子の発話には、高校生の少女にはそぐわないような知識量や認識の確かさ、優位性が表れており、主人公としての個性の強さが醸し出されている。特に、桃子の発話に見られる「あなた」の使用は、相手（あるいは自分自身）を客体化（objectification）し、周囲との関わりに一線を引く無感情で冷めた彼女の性格を示すと同時に、他人に左右されない秘めた意志の強さを持つ桃子のキャラクターの演出に貢献していると言える。

上述のように、このような「あなた」の使用は、現実世界での自然な会話ではあり得ないものであり、「仮想現実」の世界でのキャラクター設定のために使用される「役割語」（金水 2003）であると考えられる。金水（2003, 38-39）によると、日本語母語話者は役割語を知識として持ち合わせているが、その知識は、必ずしも現実の忠実な反映ではなく、現実に近いものもあれば、全く無関係であるものもあるという。役割語としての「あなた」も、現実世界での「あなた」の使用に見られたように、話者の話題に対する「認識的優位性」が何らかの形で表れているものもあれば、それが明確でないものも存在する。そして、そのほとんどが、相手との距離感を表面化する「あなた」であり、発話の客観性や中立性が強調されたものである。例(11)を参照されたい。

(11) データ (B) ドラマ「ロス：タイム：ライフ（看護師編）」

勤務中に職場を抜け出していた看護師の松永が、病院に戻った際に看護師長に叱られる場面。尾元は、松永が仕事を抜け出していた際に出会った中年男性。

1. 師長： .hhh 全く, .hhh 一体今までどこで何してたの:?
2. .hhhh あたしだって心配したんですからね:?
3. (0.8)
4. 松永： すいません.
5. (1.0)
6. 尾元： あの, これには深い訳がありまして,
7. .hhhh 何というか[その::

8. ⇒ 師長： [あなた]は::?
 9. (0.8)
 10. 尾元： Ahh, .hhhh (名刺を出す) 尾元と申します, ahh
 11. (名詞を渡す) ahhh °これ.°
 12. 師長： まあ, >とにかく< khh,
 13. 松永さんにも事情があるでしょうから,
 14. (0.5) 話は後で詳しく聞きます.

これは、初対面の相手に対して使われた「あなた」の例であるが、登場人物の希薄な関係性を中立的かつ端的に描写する働きを担っていると思われる。このような役割語としての「あなた」は、一見、よく見かけられるありふれた例に思われるかもしれないが、実際の会話で使用されることは非常に稀である。これは、妻が夫に対して使うとされる女性語としての「あなた」についても同様のことが言えるだろう。そのような「あなた」は、先行研究や日本語教育の現場でも頻繁に取り上げられてきたが、実際の夫婦間での使用率は極めて低いことが報告されており（大高 1999; 横谷・長谷川 2010）、現代日本語においては、保守的で控えめな「妻」の女性的なキャラクターを強調する役割語としての働きが優勢であると考えられる。

先行研究では、現実世界での会話に現れる「あなた」と役割語としての「あなた」が区別されることなく考察されてきたため、その使用にみられる多様性に対応しきれていないものが多かった。しかし、役割語という観点を考慮に入れることで、この問題の一つの解決策を見出すことができる。つまり、現実世界の会話に現れる「あなた」の使用（前節 4.1.1 の例(2)(3)(4)参照）にみられた話者の認識的優位性は、役割語としての「あなた」の使用においては背景化（background）される。しかしその一方で、発話の客観的描写や中立性が前景化（foreground）され、登場人物同士の距離感を効果的に表わす機能を果たしていると考えられる。

4.2 聞き手以外を示す「あなた」：引用発話内の「あなた」

4.1.では、聞き手を直示する「あなた」についてみてきたが、本節では、聞き手以外を示す「あなた」の使用に着目して考察していく。まず、このような例については、3 節のデータについての解説で示したように、全部で 16 例確認されたが、そのうちの 13 例（81.3%）が自然会話を中心とするデータ（A）に、残りの 3 例がデータ（B）に表れていた（3 節の表 2 参照）。これらのケースは、引用標識を示す「～って（言う）」をはじめ「とか（言う）」や、引用発話を装う「～みたいな」（Maynard

2005)などを伴うターンの中に現れているのが特徴的である。そのため、「あなた」の指示対象は、聞き手ではなく、その引用発話の受け手（話者自身、または、第三者）を表している。以下の例(12)と例(13)を参照されたい。

(12) データ (A) : 「あなた」の指示対象が話し手自身の例

心理カウンセラーの長谷川泰三氏による講義。長谷川氏が若い頃に交通事故で下半身不随になり、将来を悲観し、絶望して車いすで東尋坊へ自殺を図りに行った際の話。以下は、そこで出会った人々に助けられた時のエピソードである。

1. 長谷川氏： ホントにホントに何しに來たか言うてみ！って言うから::,
2. .hh いやもう, こんな体になったし::,
3. (0.2) もう, これ以上生きていくのは,
4. (0.6) ちょっと:: (0.3) 辛いし (.) と,
5. (0.2) いうふうな感じのことを言いました,
6. たら::, (0.4) そこで (.) とおせんぼした人たちがね?
7. (0.2) ああ, その話を聞いて, 私たちがこのままね?
8. ⇒ .hh あなたを (.) 放ったらかしにすと思いました↑か
9. ⇒ って言うふうに (.) 言いましたね.
10. そんな:, ちゃんと↑顔に書いてたし, という話.

(13) データ (A) : 「あなた」の指示対象が話し手自身の例

CとYはアメリカに留学中の大学生。以下は、授業前にCがジュースをこぼし、それをハローキティの絵のついたティッシュで拭こうとした時にアメリカ人のクラスメートから言われたことをYに話している。

1. C: それで:::, ティッシュ出して拭こうと思って-
2. こうティッシュをパッて広げて:::,
3. そしたらそのキティーちゃんを見て (.) その前の子が,
4. ↑かわいいかわいいとか[言い出して:::,
5. Y: [u::n
6. C: 一枚ちょうだい一枚ちょうだいとか言われて-
7. なんか- 4枚ぐらいなくなっちゃって hh
8. その- あげるので-
9. Y: un un
10. C: =しかも- なんか:::, 急にその子が:::,
11. ⇒ (.) あなたの名前をサインして hh とか hh 言い出して hh heh heh
12. ↑えっ (.) ちょっと待ってとか思- huh huh まいいやとか-
13. 漢字でサインしたら=
14. =こうやって書くの? すごいわ[ね::
15. Y: [un un
16. C: とか言われて:::, (続く)

例(12)、例(13)は、それぞれの話者の体験談であり、例(12)の 8-9 行目、例(13)の 11 行目の発話にみられる「あなた」は、その出来事を体験した話者自身を指しているのが分かる。体験談は、いわゆる“A-events” (Labov and Fanshel 1977) または“Type 1 knowables” (Pomeranz 1980; cf. Sacks 1975) と呼ばれるタイプの発話であり、話者の特権的な認識に基づいて発話されるものである。このような体験の「語り」の中で使用される引用発話は、その中に登場するキャラクターの位置づけと同時に、聞き手の認識、また会話の参与枠組み (participation framework) に対する話者の志向性が表れる (Goodwin 2005; cf. Goffman 1981)。特に、話者が自分自身を一人称ではなく、二人称代名詞「あなた」で提示する場合、話者はその会話の中で、“animator” (Goffman 1981) としての役割を果たし、自分自身を語りの中のキャラクターとして客体化 (objectification) していると言える。この二人称代名詞「あなた」による客体化は、自身の体験を、あたかも聞き手も体験しているかのように描写、演出する効果をもたらすと考えられる (cf. Stirling and Manderson 2011)。

このような引用発話内のキャラクターの客体化は、「あなた」の指示対象が第三者である場合にもみられた。しかし、その相互行為上のふるまいを見ると、それらは、上で示した二例とは少し異なる。例(14)を参照されたい。

(14) データ (A) : 「あなた」の指示対象が第三者の例

Y と M は大学院生で日本語の TA をしている。以下は、近々行われる学内の日本語弁論大会について、参加者募集の連絡をクラスでしたかどうかについて話している。

1. Y: うち::, え::, M 誘ってないよね::.
2. M: うん, なんも誘ってない.
3. Y: あ::::[:そっか.
4. M: [huh huh あっ, え- 何, あっ-
5. ⇒ Y: あなた 出ません↑か:: みたいな.
6. M: あ::, 早く来た学生には言った.
7. Y: あっそっか[そっか.
8. M: [う::ん.
9. (2.0)
10. M: でもはっきり断られた人もいる, いや出ません[って.
11. Y: [ふ::::ん.

この例では、5 行目で Y が「～みたいな」を用いて引用を装う発話 (あなた出ません↑か:: みたいな.) をしているが (Maynard 2005)、その中で「あなた」が使われ

ている。この発話は、1行目の内容の修正、補足として挿入されたものであるため、話者の実体験の直接的な引用（報告）ではない。従って、Tannen（1989, 2007）のいう“constructed dialogue”の要素を含むもので、聞き手に志向して構築された会話（発話）であると考えられる。

4.1.で触れたように、二人称代名詞「あなた」は、話者の聞き手に対する立場的権威や話題についての認識的優位性を示唆する働きがある。そのため、「先生」が「学生」に対して話すという文脈の“constructed dialogue”で使用された場合、「あなた」は、二人称の「学生」だけでなく「先生」のキャラクターをも具現化(embodiment)し、先生が特定の学生に対して、実際に話しているかのような状況を醸し出す効果があると言える。同様の例として例(15)も参照されたい。

(15) データ (A) : 「あなた」の指示対象が第三者の例

例(14)の会話の続き。以下は、学内の日本語弁論大会に出るために作文を書いた学生に対して、応募者数によっては選考で落とされる可能性があるということを予め知らせておかなかったことについて話している。

1. Y: でも- (.) そういうのってゆった方がでも::
2. °良かったような気が°
3. (0.5)
4. M: ね.
5. Y: しないかな::.
6. M: うん.
7. (0.8)
8. M: だってさ::, せっかく書いてい[るし.
9. Y: [一応ね::
10. M: 発表って思ってるところにさ::,
11. ⇒ あなたはダメですって言っちゃったらさ::,
12. かわいそうだよね::.
13. Y: う::ん.

ここでは、Mが“constructed dialogue”の中で「あなた」を用いて、「先生」と「学生」の対話を端的に例示している。現実の世界では、学生に対して「あなた」を使う日本語教師がどの程度いるかは個人差もあり不明であるが、予想としては、(特に、例(14)や(15)のような場面では)使用されないように思われる。その理由は、やはり二人称代名詞の「あなた」が先生としての立場的権威や認識的優位性を示唆する働きがあるため、「先生」の立場にある話者がむやみにそれを示唆すると、威圧的

な発話 (FTA) になりかねず、無意識のうちに避けられているという可能性が考えられる。しかしながら、“constructed dialogue” の中でなら、「あなた」が用いられても、実際の対話者 (聞き手) に対しては威圧的な発話にはならず、むしろ「あなた」を使用することが「先生」と「学生」の関係性を端的に具現化する役割を果たすため、4.1.2 で示した「役割語」のような働きをしているとも考えられる。

上述のように、日常会話のデータを見ると、聞き手を直示する「あなた」の使用頻度は、録音時間の割合からすると非常に低い。また、出現数のうちの半数以上 (23 例中 13 例) が、本節で取り上げたような引用発話内に現れたもので、聞き手以外を指示する「あなた」である (3 節の表 1, 表 2 参照)。この事実は、やはり、面と向かって聞き手を「あなた」で指示することが、話し手と聞き手の間の関係に、立場的、認識的な差や距離感があることを浮き彫りにするため、結果的に、FTA に繋がる可能性をはらんでいることを示していると言える。そのため、日常会話では、聞き手を直示する「あなた」の使用は、避けられる傾向にある (または、限られた場面でしか使用できない)。

本節で取り上げた「語り」(storytelling) や「作られた会話」(constructed dialogue) の中で使用される「あなた」も、やはり元々は聞き手を直示する FTA の可能性をもつ「あなた」の使用がベースとなって利用されたものであるため、威圧的な発話や語気の強い発話の‘演出’に繋がると思われる。このような‘演出’は、会話の連鎖構造や実際の対話者 (聞き手) の認識プロセス、話題に対するスタンスなどに志向して、その場その場で挿入的に発話される。そのため、それを通して、話し手が、話題に対する自身の認識的、感情的態度を表明しているのが伺える。例(14)や例(15)で、“author” (Goffman 1981) としての発話の中に、「みたいな」や「って言っちゃったら」のような婉曲、仮定といった表現が含まれていたのも、「あなた」を使用する「先生キャラ」の描写に表された立場的権威や認識的優位性、そして、それによって醸し出される威圧感を弱めようとした話者のスタンスの表れと考えることができる。

4.3 他の人称代名詞との相違点から見えてくる「あなた」の特徴

4.1 と 4.2 では、二人称代名詞「あなた」の使用について、話者の認識的優位性との関わりを基に、「あなた」の示唆する“判断・評価の決定権”や、聞き手との“距離感”、また“役割語としての働き”や“FTA との関わり”などを詳しく考察して

きた。本節では、このような働きを持つ「あなた」をその他の人称代名詞（特に、近年日常会話における使用の研究が進められている二人称代名詞の「おまえ」と比較して、その違いから見えてくる「あなた」の特徴を明らかにしたい。

まず、二人称代名詞「おまえ」については、「あなた」と同様、元々は空間を表わす名詞であった。それが、人（二人称、三人称）を婉曲的に指示する敬語表現「御前」として使われるようになり、通事的な意味変化を経て意味の下落が起こり、相手をぞんざいに扱うに人称詞として定着したと言われている（Shibasaki 2010）。特に、現代では、「おまえ」の使用は、男性が同性の友達に対して用いるケースが多く、無作法で荒々しいニュアンスを持つ人称詞としても知られている（Ide 1991）。また、会話データを基にした近年の研究では、「おまえ」は、話者間に衝突のある争い会話（conflict talk）の中で特に使用頻度が増すことが指摘されており（Yamazaki 2005）、強い断定表現と共起しやすく、相手に対して非難や弁解を示す発話に現れると報告されている（SturtzSreetharan 2009）。Yamazaki（2005）によると、このような「おまえ」の情動的な使用（emotive use）は、その多く（125 例中 93 例, 77.4%）が助詞やコピュラを伴わずに現れ、統語上、規範的とされない位置に現れていると述べている。表 3 は、Yamazaki（2005, 5）で示されている Table 1 の内容を筆者が簡略化したものである。

表 3 “conflict talk” にみられる「おまえ」（Yamazaki 2005, 5 : Table 1 参照）

格助詞、副助詞、とりたて詞やコピュラの付随		合計
あり	なし	
32 (25.6%)	93 (77.4%)	125 (100%)

Yamazaki（2005）は、彼のデータに現れた格助詞やコピュラを伴わない 93 例のうち 63 例が指示詞としての照応機能を果たすものと異なっていたことを指摘し、それらが、発話句頭（phrase-initial）、発話句中（phrase-medial）、発話句末（phrase-final）に現れて終助詞的な働きをしていると主張している。特に、発話句末（phrase-final）に間投詞的に挿入されるケースは、63 例中 61 例と圧倒的に多く、話者の強い感情表出を示唆していると述べられている。これは、Ono and Thompson（2003）が一人称代名詞の「私」「俺」「僕」の使用について指摘した内容にも一致し、日本語の日常会話における人称代名詞の使用が、単純に文法的な機能を果たすのではなく、談話語用論的動機によって、話者主観を表明する道具として働くことを示唆している。

二人称代名詞「あなた」も、上述のように、話者同士が拮抗した立場にある場合に使用されることがあるため、話者の強い感情表出につながるものもあり、「おまえ」の先行研究で指摘された内容に類似した点も認められる。しかしながら、「おまえ」の使用と決定的に異なるのは、「あなた」の使用には、統語上、規範的とされる位置に現れるものが圧倒的に多く存在するということである。表4は、本研究で扱ったデータに現れた「あなた」の使用のうち、格助詞やコピュラが付随して現れたものとそうでないものを比較した結果である。

表4 「あなた」の統語的側面

談話（会話）の種類	格助詞、副助詞、とりたて詞 やコピュラの付随		合計
	あり	なし	
(A) 自然会話・対談、インタビュー、講演	16 (69.6%)	7 (30.4%)	23 (100%)
(B) ドラマ・映画（脚本に基づく会話、発話）	102 (93.6%)	7 (6.4%)	109 (100%)
(C) 国会（党首討論）	86 (100%)	0 (0%)	86 (100%)
合計	204 (93.6%)	14 (6.4%)	218 (100%)

表4に示すように、「あなた」は、全体の93.6%（218例中、204例）が助詞やコピュラを伴って現れたもので、統語的な役割と共に、指示詞としての照応機能を担っているものがほとんどであった。

このように、「あなた」の使用が規範的な統語構造に即したものであることが多いという事実は、それがより「書き言葉」的な使用であることを示唆していると言え、話者のより客観的で中立的な認識スタンスに志向した二人称代名詞であることを示していると考えられる。実際、試験問題やアンケート調査などの書き言葉で、不特定の二人称（単数・複数）を表わす際に、「おまえ」やその他の二人称代名詞ではなく、「あなた」が選ばれるのも、この「あなた」に含まれる「客観性」や「中立性」といった要素に起因すると思われる。日常会話においては、この話者の認識における「客観性」や「中立性」が、聞き手との間に心理的な距離をもたらし、結果的に、相手を突き放す効果を発揮し、話者の感情表出にもつながると考えられる。しかし、これはあくまでも結果として起こる一つの現象であり、話者の強い感情を全面的に露呈するのが主な働きとなっている「おまえ」とは、大きく異なる。言い換えると、「おまえ」が情動的な動機によって使用される二人称代名詞（emotive second-person pronoun）であるのに対し、「あなた」は話者の（話題、聞き手に対す

る) 認知的な動機によって使用される二人称代名詞 (epistemic second-person pronoun) であると位置づけることができるだろう。

5. おわりに

5.1 考察のまとめ

本稿では、二人称代名詞「あなた」について、自然談話から得たデータを基に、その使用の多様性について考察した。特に、「あなた」が聞き手を直示する場合と、そうでない場合に着目し、それぞれの使用が話者の認知的優位性 (epistemic primacy) に志向した発話の中で現れていることを指摘した。

まず、「あなた」が聞き手を直示する場合については、それぞれの会話の内容や、その場のやりとりの中で、ある判断、評価、決定を下せる立場にある側が、その判断、評価、決定を受ける側に対して使用される傾向があり、互いの認知的スタンス、立場の違いを前景化する役割を果たしていることを述べた。このような、ある判断、評価、決定といった行為の遂行は、話者の知識量、経験、社会的地位、年齢、上下関係などが多かれ少なかれ絡んでくる。そのため、「あなた」の使用は、これまで社会文化的側面と結びつけて解釈されがちであったが、本研究では、この点については、「あなた」の使用が単純に社会文化的要因のみによって決定づけられるものではないということを示した。つまり、「あなた」の使用は、話者の認知的優位性への志向が動機づけとなっており、聞き手との間に認識上の非対称性があることを示唆する働きがある。そのため、「あなた」の使用は、結果的に、聞き手との間に心理的な距離をもたらし、客観性 (objectivity) や中立性 (neutrality) を帯びた発話態度から、聞き手を突き放すような態度や聞き手への批判、非難といった感情的な態度を示すことにつながる。このような「あなた」の使用によってもたらされる効果は、日常的な自然な会話の中でよりも、ドラマや映画などの脚本を基にした「仮想現実」の世界において、キャラクター設定のために利用されることが多く、「あなた」が「役割語」として様々な場面で機能していることを明らかにした。

また、聞き手以外を指示する「あなた」の使用に関しては (データは十分とは言えないが)、日常会話を中心とするデータ (A) 中での使用頻度が高いことが分かった。具体的には、これらのケースは、「語り」 (storytelling) や「作られた会話」 (constructed dialogue) 中の引用発話内で使用され、その中で取り上げられるキ

キャラクターを客体化 (objectification)、または具現化 (embodiment) する働きを持っていることを指摘した。このような「あなた」の使用は、「役割語」に近い働きをしており、話者が聞き手の理解や認知プロセスに志向して構築する会話の中でみられることから、聞き手もその語りの中の体験をしているかのように描写、演出する効果を発揮することが分かった。

上述のように、「あなた」は、話者の認識的優位性や、それに絡む立場的権威や威圧的な態度などを示唆する働きがあるため、直接「あなた」で相手を指示すると、相手の面子を脅かす行為 (FTA) にもなりかねない。それゆえに、現実の日常会話の中では、面と向かって相手を「あなた」で呼ぶことは避けられる傾向にあるが、引用発話内では、その威圧的な印象が聞き手には直接及ぶことがない。従って、日常会話における話者たちは、このような言語的な資源を利用することで、相互行為上の目的を達成しようとしていると考えられる。

最後に、本研究では「あなた」が現れる発話内の統語的配置に着目し、他の二人称代名詞「おまえ」と比較して、その特徴を指摘した。主には、「あなた」の使用は、助詞やコピュラを伴う規範的な統語構造、語順に即して現れるものが多く、より形式的で、書き言葉的な表現であることが分かった。これは、助詞を伴わず、発話末などの非規範的な語順または統語的配置を好んで使用される「おまえ」と大きく異なる点である。このような「あなた」にみられる書き言葉的な特徴は、話者のより客観的で中立的な判断・評価を表し、認識的優位性に志向したスタンスを示していると考えられる。従って、「あなた」は、情動的な動機 (emotive motivation) によって使用される「おまえ」とは対照的で、話者の (話題、聞き手に対する) 認識的な動機 (epistemic motivation) によって使用される二人称代名詞として理解することができるだろう。

5.2 日本語教育現場への示唆

日本語教育の現場では、本研究のはじめに述べたように、「あなた」は日本語の代表的な二人称代名詞の一つでありながらも、教師の間では非常に扱いにくい言葉の一つとして知られている。その理由としては、これまでの教科書や参考書に、「あなた」の使用にみられる複雑さや多様性についての首尾一貫した説明が不足していること、また具体的な使用実態についての研究もこれまでなされてこなかったことなどが挙げられるだろう。

実際、英語や中国語などに比べて、日本語では、元々二人称を示す言葉の使用頻度が低い。そのため、学習者の不自然な「あなた」の使用に対しても、単純に「使わないから」という理由で、使用を避けるよう促す教師も少なくないと思われる。しかし、ほとんどの初級の教科書で早い段階から導入される言葉でありながら、使用すると、不自然になりやすく、「会話ではあまり使われないから、使わない方がいい」という説明で済まされるのは、学習者の立場からすると、納得のいくものではないに違いない。実際、筆者自身も「‘あなた’は、具体的にどんな時に使うのか（使えるのか）」「アニメで使われているのをよく聞くが、日常会話ではなぜあまり使われないのか」「使わない方がいい理由はなぜか」など、「あなた」についての質問を受けた経験が度々あり、十分な説明ができずに反省したことがきっかけで本研究に至っている。以下では、このような学習者の疑問に答えるべく、本研究で明らかになった点を、日本語教育の現場で利用可能な形で示したい（1～4 参照）。

1. 「あなた」は、ある話題に関して、話し手が聞き手より、認識的に優位であるというスタンスを持っている際に使われる。特に、何らかの判断、評価、決断を下す側にある話者が、その判断、評価、決断を受ける側に対して使用される場合が多い。
2. 認識的優位性を示唆する「あなた」は、日常会話で使用すると、いわゆる“上から目線”的で、威圧感のある印象や、冷たく相手を突き放すような発話になりやすいため、避けられる傾向にある。
3. 「あなた」は、ドラマやアニメ、映画など「仮想現実」の世界では、頻繁に使用される。しかし、これは、キャラクターの特徴を着色したり、強調したりする「役割語」として使用されたものであり、実際の会話で同じ様な使い方をすると、違和感のある発話になりやすい。夫婦間で、妻が夫に対して使う「あなた」は、その典型例と言え、保守的で控えめな「妻」の女性的なキャラクターを強調するが、現代の「現実世界」での日常会話ではほとんど使われない。
4. 「あなた」は、日常会話の中では、体験談を語る際に引用発話内で使われる

ことがしばしばある。引用発話内で自分自身や第三者を指す「あなた」の使用は、聞き手を直示する「あなた」に比べて、威圧的な印象を与えるリスクが少なく、不自然な使用も避けやすい。そのため、「あなた」が自然な形で使われやすい発話環境として示すことが可能である。(例えば、「言われて驚いたこと、ショックだったこと、困ったこと」などのようなトピックで体験談を話す場合は、引用発話内の「あなた」が有効に使用できる可能性が高いと言える。)

以上、本研究で指摘した重要な点を日本語教育の現場に応用できる形でまとめたが、これは、あくまでも日本語教師の立場から「あなた」の使用に関する知識として備えておきたい情報を要約したものである。従って、実際の会話で、学習者に「あなた」の使用をむやみに推奨するものではない。そしてまた、「あなた」の使用に焦点を当てた練習をあえて行うことを主張するものでもない。しかし、日本語教育の現場に立つ者の一人としては、やはり、より自然な言葉の使い方と明確な説明が学習者に提供でき、指導していけることが求められていることも事実である。そのため、必要な言語学的知識を蓄積し、それを教室活動に生かす応用力と実践力を磨いていくことも重要であると言える。

最後に、本研究では、二人称代名詞「あなた」に焦点を当てて考察してきたが、日本語にはその他にも様々な二人称を示す言葉が存在し、それらの適切な使い分けは、日本語学習者にとっては依然厄介な問題として残されている。特に、日常会話で使用頻度の高い待遇性接尾辞(「～さん」「～君」など)や親族語彙、役職名などと、「あなた」が同一話者の発話の中で現れる場合のそれぞれの違いについては、ここでは触れることができなかった。しかし、今後の課題として、これからも日常会話にみられる言葉の使用実態に日頃からアンテナを張り、地道に言語研究を重ねていくことで、言語学、そして日本語教育の現場に、今後も貢献できるものを残していきたい。

注

- (1) 橋口(1998, 58) 参照
- (2) 横谷・長谷川(2010)の研究では、家族内で使用される様々な呼称について、それぞれが親子間、夫婦間で表わしうる「親密さ(疎遠さ)」と「敬意(横柄さ)」の程度を1～

7段階で評定するというアンケート調査が行われている。横谷・長谷川は、この調査の統計結果から、家族内呼称と家族関係の相関を考察しているが、二人称代名詞「あなた」についての具体的な使用例や使用される談話環境や会話例などについては述べられていない。

- (3) Stirling and Manderson (2011) では、乳がんと診断された女性の体験談の中で、明らかに本人しか経験していない内容について、一人称の I ではなく、“self-including reference” の you が使われていることに着目し、研究されている。彼女らの研究によると、このような you の使用は「体験者 vs. 被体験者」という成員カテゴリー (Membership category) を示唆するとされている。具体例については Stirling and Manderson (2011, 1590-1596) 参照。
- (4) “Institutional talk”は、会話分析 (Conversation Analysis) における専門用語で、日本語では「制度的場面の会話」や「制度的相互行為におけるトーク」と訳され、教育・医療現場での会話や法廷でのやりとりなど、社会組織、機関活動の一部として起こる会話を指す。主に、これらの特殊な機関・場面設定での会話と日常会話 (Ordinary conversation) にみられる会話の連鎖構造、話者交替のシステムとの比較から研究が行われている (Heritage 1998)。
- (5) この講演のデータに関しては、ある程度準備された内容について話されている可能性が高いが、(B) のドラマの脚本を基にした会話や、(C) の国会における討論形式の発話とは明らかに談話の種類が異なる。また、講演内容が講演者の体験談であり、日常会話にみられる「語り (Storytelling)」の連鎖パターン (Jefferson 1978) に近いものであったこと、録音時間が短いこともあり、便宜上 (A) に入れ、談話のタイプを分けなかった。
- (6) タイプ (C) のデータの文字化作業については、まず、国会議事録検索システムを通して、党首討論の書き起こしデータをランダムに7つ選び、それらを録画ビデオと照らし合わせて筆者が再度文字化したものである。
- (7) この結果については、法廷では、証人や被告人は、基本的に質問されたことに答えることしかできないため、当然、質問者側の言動について判断・評価する発話が極端に少ないということも原因の一つと考えられる。しかし、これも、「法廷」という制度的場面設定での相互行為と裁判における認識的権威の存在による影響とみることもできるだろう。

Transcription symbols

(.)	マイクロポーズ
(秒数)	沈黙の長さ
hhh	吐く息
.hhh	吸う息
あ-	発話が途中で切れていることを示す
=	次のターンへとよどみなく繋がっていること (または急いで次に移る発話) を示す

[重複する発話の始まり
あ:::	引き延ばされた発話
°あ°	周囲の発話より小さく発話されていることを示す
↑↓	矢印のすぐ後の発話が急に高い（または低い）ピッチで発話されたことを示す
.	下降調のイントネーション
,	継続調のイントネーション
?	上昇調のイントネーション
> <	発話のテンポが速くなっていることを示す

参考文献

- 大高博美 (1999) 「日本語における対称指示語彙選択のストラテジー」『言語と文化』
 関西学院大学言語教育センター紀要委員会（編）通号 2, pp. 29-41. 関西学院大
 学言語教育研究センター紀要委員会
- 奥秋義信 (1988) 『日本語よどこへ行く-まちがいだらけの言葉づかい』リヨン社
- 大浜るい子・荒牧ちさ子・曾儀婷 (2001) 「日本語教科書に見られる自称詞・対称詞
 の使用について」『中国四国教育学会 教育学研究紀要』 第 47 卷 第二部 pp.
 342-352.
- 金水敏 (2003) 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』岩波書店
- 鈴木孝夫 (1999) 『ことばと文化 私の言語学 鈴木孝夫著作集 1』岩波書店
- 中等教育学会（著）(1933) 『中等学校作法要項解説：文部省調査』西東社出版部
- 橋口美紀 (1998) 「二人称代名詞「あなた」の歴史的変遷について」『鹿屋体育大学
 学術研究紀要』第 19 号 pp. 55-63.
- 三輪正 (2000) 『一人称、二人称と対話』人文書院
- 三輪正 (2005) 『人称詞と敬語 -言語倫理的考察』 人文書院
- 横谷・長谷川 (2010) 呼称が示す談話モダリティ -無規定な呼称とそれ意外の呼称
 との比較- 東北大学大学院教育学研究科研究年報 第 59 集・第 1 号 pp. 275-292.
- 礼法研究会（著）(1941) 『礼法要項解説』帝国地方行政学会
- 国会会議録検索システム：<http://kokkai.ndl.go.jp/>
- 『角川 古語大辞典第一巻』（1982）中村幸彦・岡見正雄・阪倉篤良義（編）角川書店
- 『広辞苑』（2008）新村出（編）第六版 岩波書店
- Atkinson, J. M and Drew, P. (1979) *Order in Court: The Organization of Verbal
 Interaction in Judicial Settings*. London: The MacMillan Press LTD.
- Brown, G. and S. Levinson. (1987) *Politeness. Some Universals of Language Usage*.
 Cambridge: Cambridge University Press.
- Drew, P. and Heritage, J. (1992). Analyzing Talk at Work: An Introduction. In Paul Drew
 and John Heritage (eds.) *Talk at Work*. pp. 3-65, Cambridge: Cambridge University

- Press.
- Chafe, W. L. (1986) Evidentiality in English Conversation and Academic Writing. In W. L. Chafe and J Nichols (eds.), *Evidentiality: The Linguistic Coding of Epistemology*, pp. 261-272. Norwood: Ablex.
- Goffman, E. (1981) *Forms of Talk*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Goodwin, C. (2005) Interactive Footing. In E. Holt and R. Clift. (eds.) *Reporting Talk: Reported Speech in Interaction*. pp. 16-46. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jefferson, G. (1978) Sequential aspects of storytelling in conversation, In J. Schenkein (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, pp. 219-248. New York: Academic Press.
- Jefferson, G. (1989) Preliminary notes on a possible metric which provides for a “standard maximum” silence of approximately one second in conversation. In D. Roger, P. Bull, (eds.) *Conversation: an interdisciplinary perspective*, pp. 166-196. Clevedon: Multilingual Matters.
- Hayashi, M. (2003) *Joint Utterance Construction in Japanese Conversation*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Heritage, J. (1998) Conversation Analysis and Institutional Talk: Analyzing Distinctive Turn-Taking Systems. In S. Cmejrková, J. Hoffmannová, O. Müllerová and J.Svetlá (eds.) *Proceedings of the 6th International Congress of IADA (International Association for Dialog Analysis)*, pp. 3-17. Tübingen: Niemeyer.
- Heritage, J. and Raymond, G. (2005) The Terms of Agreement: Indexing Epistemic Authority and Subordination in Talk-in-Interaction, *Social Psychology Quarterly*, Vol. 68, No. 1, pp. 15-38.
- Hinds, J. (1987) Thematization, Assumed Familiarity, Staging, and Syntactic Binding in Japanese. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. pp. 83-106, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Hopper, P. and E. C. Trougott. (2003) *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Ide, S. (1991) How and why do women speak more politely in Japanese. In Sachiko Ide and Naomi Hanaoka McGloin (eds.), *Aspects of Japanese women's language*. pp. 63-79, Tokyo: Kurosio,
- Ishiyama, O. (2012) The diachronic relationship between demonstratives and first/second person pronouns. *Journal of Historical Pragmatics* 13 (1), pp. 50-71.
- Kamio, A. (1997) *Territory of Information*. Philadelphia: John Benjamins.

- Kim, A. (2012) Power and Solidarity as Observed in the forms of Address/Reference in Japanese Political Discourse: Focusing on Selected Samples from the Minutes of the Diet (2001-2005) in BCCWJ. 慶応義塾大学 日本語・日本文化教育センター紀要 『日本語と日本語教育』 40. pp. 19-47.
- Labov, W. and Fanshel, D. (1977) *Therapeutic Discourse: Psychotherapy as Conversation*. New York: Academic Press.
- Lerner, G. and Kitinger, C. (2007) Extraction and aggregation in the repair of individual and collective self-reference. *Discourse Studies*, Vol. 9 (4), pp. 526-557.
- Maynard, S. (1993) *Discourse Modality: Subjectivity, Emotion and Voice in the Japanese Language*. Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- Maynard, S. (2005) Another conversation: expressivity of *Mitaina* and inserted speech in Japanese discourse. *Journal of Pragmatics* 37 (6). pp. 837-869.
- McGloin, N. H. (1981) Discourse Functions of No Desu. In S. Makino (ed). *Papers from the Middlebury Symposium on Japanese Discourse Analysis*, pp. 151-76. Urbana, Illinois: Toyota Foundation.
- McGloin, N. H. (1987) The Role of *Wa* in Negation. In Hinds, J., Maynard, S. and Iwasaki, S. (eds.) *Perspectives on Topicalization. The Case of Japanese wa*. pp. 165-183, Philadelphia: John Benjamins Publishing.
- McGloin, N. H. (1989) *A Students' Guide to Japanese Grammar*, Tokyo: Taishukan Publishing Company.
- McGloin, N. H. (2002) "Markers of epistemic vs. affective stances: 'Desyoo' vs. 'zyanai'". In N. Akatsuka and S. Strauss (eds). *Japanese/Korean Linguistics* 10, pp. 136-149, Stanford: CSLI.
- Mori, J. (1999) *Negotiating Agreement and Disagreement in Japanese Conversation: Connective Expressions and Turn Constructions*. Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Ono, T. and S. A. Thompson. (2003) Japanese (*w*)*atashi/ore/boku*: they're not just pronouns. *Cognitive Linguistics* 14 (4), pp. 321-347.
- Pomeranz, A. (1980) Telling my side: "Limited access" as a "Fishing Device". *Sociological Inquiry* 50, pp. 186-198.
- Sacks, H. (1972) On the analyzability of stories by children. In Gumperz, J. J. Hymes, D. (eds.), *Directions in Sociolinguistics: The Ethnography of Communication*. pp. 325-345, New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Sacks, H. (1975) 'Everyone has to lie'. In Sanchez, M. Blount, B. (eds.), *Sociocultural*

- Dimensions of Language Use*. pp. 57-80. New York: Academic Press.
- Schegloff, E. A. (1996) Confirming Allusions: toward an empirical account of action. *American Journal of Sociology* 102, pp. 161-216.
- Schegloff, E. A. (2007) A tutorial on membership categorization. *Journal of Pragmatics* 39, pp. 462-482.
- Schegloff, E. A., G. Jefferson, H. Sacks. (1977) The preference for self-correction in the organization of repair in conversation. *Language* 53 (2), pp. 361-382.
- Shibasaki, R. (2010) Frequency as a cause of semantic change: With focus on the second person form *omae* in Japanese. In Van Linden, An, Jean-Christophe Verstraete and Kristin Davidse (eds.), *Formal Evidence in Grammaticalization Research*. 2010 iii, pp. 225-244.
- Stirling, L. and Manderson, L. (2011) About *you*: Empathy, objectivity and authority. *Journal of Pragmatics* 43, pp. 1581-1602.
- Stivers, T., Mondada, L., and Steensig, J. (2012) Knowledge, morality and affiliation in social interaction. In Stivers, T., Mondada, L., and Steensig, J. (eds.), *The Morality of Knowledge in Conversation*. Cambridge : Cambridge University Press.
- SturtzSreetharan, C. (2009) *Ore* and *Omae*: Japanese Men's Uses of First- and Second-Person Pronouns. *Pragmatics* 19 (2) pp. 253-278.
- Takahara, K. (1992) Second Person Deixis in Japanese and Power Semantics. *Intercultural Communication Studies* II (1). pp. 117-128.
- Tannen, D. (1989) *Talking Voices, Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tannen, D. (2007) *Talking Voices, Repetition, Dialogue, and Imagery in Conversational Discourse*. Second Edition. Cambridge: Cambridge University Press.
- Yamazaki, M. (2005) From PERSON marker to AFFECT marker: The grammaticization of the Japanese 2nd person singular pronoun *omae* in conflict talk. Ms. University of Arizona.

(makis@kansaigaidai.ac.jp)